

# 2019 年度（2019 年 9 月）卒業アンケート結果について

※数字は実数

2019年9月卒業生33名のうち、28名から回答（84%）があった。

## I 専修言語について

専修言語	英語	フランス語	ドイツ語	中国語	韓国語	日本語	合計
	2	0	2	0	1	23	28
1 .あなたが専修言語以外に学んだ言語は何ですか。(複数回答可)	英語	フランス語	ドイツ語	中国語	韓国語	日本語	
	21	4	1	0	0	0	
	その他	未選択	無回答				合計
	0	0	0				26
<その言語を学んだ期間>	1年春学期 ～1年秋学期	1年春学期 ～2年春学期	1年春学期 ～2年秋学期	1年春学期 ～3年春学期	1年春学期 ～3年秋学期	1年春学期 ～4年春学期	
	1	0	0	8	1	0	
	1年春学期 ～4年秋学期	1年春学期 のみ	2年春学期 のみ	2年春学期 ～3年春学期	2年春学期 ～3年秋学期	4年春学期 のみ	
	0	2	7	2	0	1	
	1年春学期 ～4年春学期	3年春学期 のみ	3年秋学期 ～4年秋学期	3年春学期 ～4年秋学期			合計
	1	0	14	1			38
2 .あなたが学んだ研究プログラムは 何ですか。 (複数回答あり)	①異文化 国際 理解プログラム	②観光ホスピ タリティプロ グラム	③翻訳・ 通訳 プログラ ム	④国際ビジ ネス プログラム	⑤英語専門 職 プログラム	⑥比較 社会文 化 研究プロ グラム	
	12	2	2	3	2	0	
	⑦ヨーロ ッパ研究プロ グラム	⑧アジア研究 プログラム	⑨日本 研究 プログラ ム	無回答			合計
	1	5	8	3			38

専修言語以外に学んだ言語の回答をみると、英語が21人（80%）と最も多い。9月の卒業生の多くは留学生で、日本語以外の外国語を学修する余裕あるいは必要がなく、あえて第2外国語を選ぶとすれば、英語に集中したものと考えられる。

本学では2つの言語の学修を推奨しているが、第2言語を学修した期間を問う回答では、「1年春学期から3年春学期」が8名、「2年春学期のみ」が7名、「3年秋学期から4年秋学期」が14名であった。これは回答者の多くが留学生であることから、2年次、3年次編転入学が多いことと関係していると思われる。

学修した研究プログラムをたずねる質問では、複数回答ではあるが、異文化国際理解プログラムと日本研究プログラムの回答が多かった。これは回答者の多くが留学生なので、取るべき科目あるいは取りやすい科目がこの2分野に集中したのであろうと思われる。また、3月卒業生と同様、無回答（3）とする学生が若干名いた。一昨年の分析コメントにもあったように「研究プログラムごとの最低修得単位数が設定されておらず、研究プログラムを横断して必要な科目を履修できるような設計になっている」ことから、研究プログラムへの所属意識が低いのではないかとも言える。留学生の場合であれば、日本研究プログラムが中心となることは間違いないが、いずれにせよ、今後は、専修言語と研究プログラムの一体性を高めていくように、研究プログラムの設計を再考する必要がある。

## II 教育課程について

	①そう思う	②ある程度 そう思う	③あまり 思わ ない	④思わな い	⑤わか らない	(無回 答)	合計
1. 「基礎演習Ⅰ」から「日本語表現法Ⅳ」までの日本語リテラシー科目は、様々な学修を行っていくうえで必要だと思いますか。	16	12	0	0	0	0	28
2. 自分の興味や関心に従って、授業科目を履修することができたと思いますか。	11	16	1	0	0	0	28
3. 卒業するにあたって、この4年間で十分な語学学習ができ、語学力が身についたと思いますか。	10	17	1	0	0	0	28
4. 社会で必要となる教養や専門知識など身につけることができたと思いますか。	18	8	2	0	0	0	28
5. 自らが学びたいという姿勢、主体的に学ぶ力は身についたと思いますか。また、卒業後も、自ら学ぶことのできる力が身についたと思いますか。	11	17	0	0	0	0	28

設問 1 の、初年次導入科目ならびに日本語リテラシー科目（1 年次～3 年次必修）の必要性については、「そう思う」「ある程度そう思う」と回答した学生の割合が100%であり、その必要性の認識は定着してきたと言えそうである。この分野の必要性はよく理解されているようである。

設問の2は、「そう思う」「ある程度そう思う」と回答した学生の割合が96%であった（「あまり思わない」が1名）。上述の専修言語のアンケートにみられたように、専修言語と研究プログラムの主体的学修意識が醸成されており、学びたいことが学べたとする卒業生がほとんどであったということであろう。

設問3の語学力については、本学の語学教育課程において、「そう思う」「ある程度そう思う」とある程度以上の語学力を身につけることができた肯定的回答した学生の割合は96%にのぼり（「あまり思わない」1名）、設問2と関連するものと考えられる。

設問4では、設問1と同様、「そう思う」「ある程度そう思う」と肯定的回答した学生の割合は93%である（「あまり思わない」2名）。教養科目や専門科目などを通して、学生たちが必要とする知識や教養を身につけることができたと評価していると考えられる。

設問5は、大学教育の本質的役割の問いであるが、「そう思う」「ある程度そう思う」と肯定的回答した学生の割合は100%である。ほとんどの学生たちは主体的な学修に取り組める自信を持って卒業してくれたと言えるだろう。

以上により、教育課程の設問については、全体として高く評価されていると受け止めて良いと考える。

### Ⅲ 大学生生活について

	①そう思う	②ある程度 そう思う	③あまり思 わない	④思わな い	⑤わから ない	(無回 答)	合計
1.学業にやりがいを持って取り組むことができたと思いますか。	15	12	1	0	0	0	28
2.自分の大学生生活（学業以外）は楽しかったと思いますか。	19	9	0	0	0	0	28
3.授業内外、課外活動などで教職員との接点を持つ機会はあったと思いますか。	13	10	5	0	0	0	28
4.在学中の交流はできましたか。	13	12	2	1	0	0	28
5.全体的に大学側のサポートは適切でしたか。	17	10	1	0	0	0	28

設問1の学業面について、「やりがいを持って取り組めた」とほぼ肯定的な評価が寄せられており96%となっている（「あまり思わない」1名）。この数字をみれば、全体として充実した学業生活をおくることができたと受け止めている学生がほとんどだと考えて良いだろう。

設問2の大学生生活全般についても、①と②を合わせ、「楽しく過ごせた」と肯定的な評価が寄せられており、100%となっている。この数字をみれば、全体として、充実した大学生生活（学業以外でも）をおくることができたと受け止めている学生がほとんどだと考えて良いだろう。

設問3は教職員との距離感をたずねているが、これは82%と、3月卒業生（73%）と比べてかなり高い（「あまり思わない」5名）。少人数、教員と学生との近さ、接点の多さをアピールしていることから、この評価を失うことのないようにすることが重要である。

設問4では、日本人学生・留学生を含め、学生間の交流についてたずねている。設問は「在学中の交流はできましたか」とやや抽象的な質問となっており、留学生との交流（日本人学生にとって）、日本人学生との交流（留学生にとって）、また留学生同士、日本人学生同士を分けずにたずねた。どのような交流を思い描いて回答したかは明確ではないが、少なくとも数字から見れば、「そう思う」「ある程度そう思う」の肯定的評価の割合は89%になっており（「あまり思わない」2名、「思わない」1名）、学生同士の交流は積極的にはかられたようである。

設問5も曖昧なたずねかたであるが、「そう思う」「ある程度そう思う」の回答は96%であり（「あまり思わない」1名）、回答の結果からみれば、4年間学んだ大学に対して肯定的な評価判断を下しているといえよう。

設問3、4以外のすべての設問について、96%～100%の肯定的な評価が見られた。

IからⅢを通してみると、回答者数が少なくなおかつ回答者の多くが留学生なので、正確な傾向の把握は難しいが、全体的に留学生の方が肯定的な回答が多いということが言えるかもしれない。

#### IV 自由回答について

自由記述では否定的なコメントは見当たらず、大学への好意的なコメントが寄せられている。いくつか、本学にとって嬉しいコメントを抜粋しておきたい。

「多文化共生という意味がわかりました」

「卒業研究を通じて、自ら情報を収集し論理的にまとめて他人に伝えることは長崎外大に入学してから一番大きな収穫です」

「入学してから卒業までの2年間で、だんだん日本の生活になじみアルバイトもうまくいき日本人と友達になりました。とてもうれしい留学生活と思いました」

「貴重な体験でした。将来の仕事に役立つことを勉強し活用できると思います。他国の学生との交流を通じていろいろな知識を得ました」

「留学していた短い期間に自分の能力を鍛え一人前な大人に成長してきた。本当に良かったです」

「先生方と職員の皆さまのおかげで充実した留学生活を過ごしました。感謝の気持ちでいっぱいです」

毎年のものであるが、このアンケート結果をもとに問題点や課題について点検し、修正・改善することによって、より良い教育環境及び学修生活環境を実現していくことが本来の目的であることを確認しておきたい。

教育支援部長

小鳥居伸介

2020年10月8日